



高P連だより

〒060-0005 札幌市中央区北5条西6丁目1番 第二北海道通信ビル8F
TEL (011) 232-0007 FAX (011) 232-0006
URL: <http://www.hokkaido-koupren.com/>

今号の内容

- ▶第63回全国高P連山口大会
- ▶シリーズ北の志
・旭川商業高等学校
- ▶高校生と語るつどい
- ▶臨時理事会報告
- ▶支部だより
釧路・空知

第63回全国高等学校PTA連合会大会山口大会

メインテーマ

「夢から志へ」

平成25年8月21日～22日



▼開会式・全大会▲

8月22日(木)の開会式及び全体会は、メイン会場

第63回全国高等学校PTA連合会大会が、メインテーマを『夢から志へ』、サブテーマを『たくましく生きるチカラを育むために、今、私たちができること』を掲げて、8月21日(水)～22日(木)の2日間、山口県山口市の山口県スポーツ文化センターを主会場に全国から一万人の参加者を迎え開催されました。

第63回全国高等学校PTA連合会大会 山口大会 参加報告

北海道静内高等学校PTA副会長 小野寺 和昭

開会式では、大会主催者であります相川順子全高P連会長より、東日本大震災で被災された高校生に対して全国高P連から寄せられた義捐金(1億2千万円)への感謝の言葉と共に、「高校生が社会の一員として自分の夢を成し遂げられるよう、私たち大人の役割を本大会で確認しよう」と式辞を述べられました。

続いて、多々良健司実行委員長より、

であります山口県スポーツ文化センターアリーナの模様を各会場(山口市内5会場・宇部市内2会場)のスクリーンにライブで映し出し行われました。開会式前に行われたアトラクションでは、山口市立明倫小学校の生徒による幕末の思想家・教育者である吉田松陰の言葉の朗唱が披露された後、板谷副実行委員長の開会宣言で本大会が開幕しました。

「次代を担う子どもたちに今求められるのは、未来を生き抜く基盤力です。子供たちに大志を抱いてもらいたい。山口で皆さんの思い、今後に向けていろんな知恵が集まることを祈念する。」と挨拶されました。



▼基調講演▲

基調講演は、「日本の教育の再生」と題して、最初に山口県出身の安部晋三内

閣総理大臣のビデオメッセージが流れ、「社会総かりで子供たちを育てていこう。夢を実現させる力を身につけよう」と力強い励ましの言葉がありました。

続いて下村博文文科科学大臣より、日本再生の一つの柱である教育改革について、日本の現状から、再生の方向性、施策について、データを用いて講演が行われました。

講演の中で下村大臣は、強い日本を取り戻していくため、第2次安倍内閣は教育再生を最重要課題として政策を進めている。今の日本の現状は、少子化・高齢化の進行、非正規雇用の増加、子供の貧困率増加、国際的存在感の低下などの問題を抱える中で、今の高校生は、今日よりも明日が、



もつと世の中が悪くなる、将来がますます暗くなるといふマインドにあり、内向き志向が強く、自己評価も海外の学生と比べるとかなり低くなっている。グローバル社会に対応するために、個人の付加価値や一人一人の人材力を高め、教育力を身につけること、つまりグローバルマインドスキルを育成を行う必要性、そして、「クリエイティブにものを考える力」「自律的に考え活動する力」「優しさ、思いやりなどの感性」を持つていくことの重要性を述べられました。また、教育再生の具体的な施策として、「大学入試の抜本的見直し」「いじめ対策防止法条例」「キャリア教育の充実」「高校教育改革」「海外留学支援」「小・中・高等学校を通じた英語教育の強化・導入」「教育課程全体の見直し」「我が国伝統文化、アイデンティティに関わる指導」「国際バカロレア認定校(100校)」「スーパーグローバルハイスクール」「スーパーグローバル大学」「給付型奨学金」を掲げ、改革・再生を目指していくという内容で講演が行われました。

▼記念講演▲

記念講演は、各会場ごとに題目が設定されて行われました。私の会場では「吉田松陰の志教育」と題して、萩博物館特別学芸員の一坂太郎氏と松蔭神社宮司で山口県文化連盟会長の上田俊成氏の二人から、幕末の志士を数多く輩出した松下村塾における吉田松陰の教育についての講演が行われました。

講演の中で、松下村塾で松陰が塾生たちの指導に当たった期間は、わずか2年余りと短い期間ではあったが、松陰は自分の信念を塾生たちにぶつけ、一方的に教えるのではなく、塾生たちと一緒に問題を考えていくことを行い、また、塾生に対して「人間とは何かを学ぶことである」「学者になつてはいけない。実行しなければならぬ」と言い、学んだことを活かして実行に移すという大切さを強く説いたと、お話がありました。

▼分科会▲

分科会では「生徒指導とPTA」教育支援とコミュニケーション」をテーマに、茨城県立笠間高等学校 杉森



加代子PTA相談役より「健全な成長を見守るために」、新潟県立新潟江南高等学校 木場克俊PTA会長より「学校と家庭との協働による生徒指導」、岐阜県立大垣工業高等学校 坂口智之育友会副会長より「保護者からのメッセージ」、熊本県立熊本商工高等学校 渡邊明子育友会顧問より「地元とのコミュニケーション」で子どもの育成を」とそれぞれのPTAの取り組みについて発表がありました。

学校を取り巻く諸課題を解決し、子供たちの望ましい発達を支援するために、家庭、学校、地域社会が連携した取り組みが必要であり、特に保護者が中心となって積極的に学校行事に

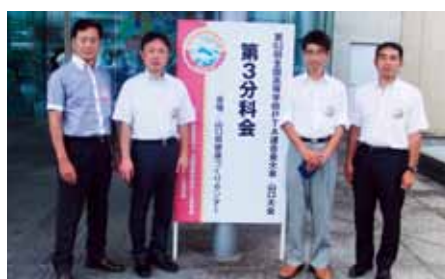
関わっていくことが重要であると感じました。

▼まとめ▲

全国から一万人の参加者を迎え開催された山口大会では、子供たちの未来を生き抜く力の育成のために社会全体で支援を行う必要性を改められて考えさせられる良い機会となりました。

大会全体を通じて、各都道府県におけるPTA活動について、熱心に意見や情報の交換を行うことができました。今後のPTA活動及び学校経営に役立てていきたいと思えます。

最後に大会を運営、実行されました山口県高等学校PTA連合会の関係者及び会員の方々に感謝申し上げます。本大会の参加報告いたします。



Create New Value

私たちにしかつけない“世界品質の安心”を。



Member of AIG

AIU損害保険株式会社

札幌支店・旭川支店・釧路支店・函館支店

道高P連では、AIU保険の「高校生総合保障制度・自転車総合保障制度」を皆様に推薦しています。ご検討ください。

私にジャストフィットする保険を選ぶなら

いろいろなかたちの「安心」があるエース保険。

いつでも、どこでも、今日も、未来も。どんな人にもびったりな「安心」と「満足」を、エース保険が提供いたします。



道高P連では高校生のために「災害保障制度」を主催しています。多くの学校の参加を期待しております。

Heart to Heart 北の志

—ひたむきに頑張る君たちを応援したい—

第2弾

まだまだあるぞ
甲子園

野球だけじゃない、いろいろな甲子園を探して
そこで活躍する皆さんと高校生たちを紹介します。



本校文芸部は現在17名で活動していますが、まだ歴史が浅く、部としての活動は8年程度しかありません。普段は小説、詩、短歌、俳句、随筆などを部員同士で合評しながら創作に励んでいます。また、年度の終わりに、作品の集大成として文芸部誌を発刊するのが楽しみとなっています。そのような部誌には長編小説と並んで必ず100首以上の短歌が掲載されています。全員が精力的に短歌を作っているからです。旭川商業高校の文芸部では、入部したその時から短歌づくりを開始します。短歌づくりは、リズムに乗るのが大前提ですが、実際の自分の感動の中心をじっくり見つけて、自分の言葉で、わかりやすく丁寧に表現していく

2013全国高校生短歌大会 〔「短歌甲子園」〕優勝を果たして

北海道旭川商業高等学校 文芸部顧問 教諭 大友 勝 弘

くことが厳しく求められます。始めた頃は簡単に説明文のように出来事を描写してしまうだけで心が動かない作品ばかり作っていても、数百の短歌を詠うなかでじわじわと具象性が表れてきて、訴える力をもつてきます。一年生はほとんどその始まりで躓きますが、丹念に作り続けると、表面的で軽薄な表現からは卒業してきているように思えます。

また、本校の文芸部は全国大会出場常連の写真部とのコラボレーションしながらの活動もあります。それは、写真部員が撮った写真からのインスピレーションをもとに短歌を作るということです。展示の際には、写真の横に文芸部の短歌も掲示し表現の幅を広げていくことに一役買っています。それは、短歌の世界を広げ、個性を発揮していく力量にもつながっているのだと思います。そのような日常の活動のひとつの表現の場として短歌甲子園を位置づけています。ただ単に上手な短歌を作るのではなく、現実を掘り下げ、視点を凝縮することによってことばを生かして真摯に自分と対峙して表現する大切さを身に

つけてほしいのです。それは必ずや他の分野の表現にもつながるものだと思っています。

毎年、石川啄木の故郷である盛岡市で開催される短歌甲子園は、今年で8回目を迎えています。8月21日から23日まで、全国予選を通過した36校36チームが出場しました。この大会は先鋒・中堅・大将の3人による各高校1チームが題詠によって短歌をつくり、互いにステージ上で競い合うという試合形式で進められます。その際審査員から何らかの質問があるのが特徴です。明確にこれに答えることも求められています。また、短歌創作の過程や本番での発表時でも顧問からは一切アドバイスできないことになっているのもこの大会の厳しさです。本校文芸部ではこれまで7回の出場を果たしていますが、ベスト8が最高位で、最近はずりぐを勝ち抜くことができず、決勝トーナメントに進出できないまま涙を飲んで帰ってきていました。今回は、昨年までの予選リーグ落ちの悔しさを晴らすと言う強い思いで、まずは勝負に1勝を目指して



予選リーグでは1ブロック内3チームでの戦いでしたが、2勝したチームがなく、勝ち数1位の本校文芸部が抜け出ることができました。このことで念願の決勝トーナメントへの進出が決まったのです。それから決勝戦を含めて4回の試合がありました。しかし、その試合すべて2勝1敗という結果でした。つまり、僅差の勝利といえるでしょう。とくに決勝戦は名門、県立秋田高校との試合はハラハラドキドキの連続でした。先鋒が「新しい季節が芽吹く一瞬を君と一緒に数えていたい」という歌で、審査員判定4対1で勝ち、そのあと中堅が1対4で負け、ポイントが1対1の五分とになりました。そして最後、大将が「新しい話題はまるでないけどさああなたの好みききつけよう」という歌で劇的に4対1で勝ったのです。

満員の会場からは大きなどよめきが起ったことを覚えています。秋田高校はなめらかな表現でリズムもよく優れた短歌で決勝戦まで勝ち抜いてきていましたから、私たちは不安を覚えていました。しかし、この場面でも「まずは1勝！」

の合言葉は貫き、緊張しつつも軽やかな気持ちで臨んだのでした。技術的にも語彙の幅でも秋田高校には太刀打ちできないのですが、この3人は、ひるまず、てらうことなく、素直に歌い上げたのがよかったのだと思います。私からは、とにかく最後まで「自分らしく」を忘れずに明瞭なことばで真正面から描いていこう！というアドバイスを行ってました。普段の部活動での創作や夏休みでの本番さながらの集中的な練習試合で培ってきた力をすべて出し尽くすしかなかったのです。このようにして結果が優勝となったことはこのうえもない嬉しさです。「全国優勝」を手にした高揚感、私もこの3人以外の文芸部の生徒も含めてこれからの人生にさまざまな示唆を与えてくれるものと感じています。それはまた、今後の私にとっても大きな糧となるに違いありません。来年は新たな決意でまた生徒たちとたっぷり短歌を楽しみたいと思っています。

平成25年度「高校生と語るつどい」

北見支部

テーマ「魅力あるオホーツクの地域・人づくり」



本年度の「高校生と語るつどい」は、北見支部が主管となり北見柏陽高校が当番校として、8月2日(金)・3日(土)の二日間に渡って開催いたしました。テーマとして「魅力あるオホーツクの地域・人づくり」と題しまして、管内26校の中から23校の生徒、教員、保護者合わせて約120名の参加者で、北見市常呂町「北海道立常呂少年自然の家ネイパルクツッピー常呂」を会場に行われました。

本事業は、地域社会に身を置き、大人と直接ふれあ



う機会を設けることで21世紀を担う高校生の健全な育成を図る環境づくりの一助とするために、毎年北海道各支部で開催されております。その様なことを踏まえた中、開催場所を道立の宿泊研修施設で行うことは、本事業の目的を果たすために大変有意義な場所であったと思います。なにしろ、自分たちの寝床づくりや部屋の清掃、夕食づくり、入浴時間の規制、消灯時間等々：ホテルなどの宿泊施設では体験しない事が組み込まれていますので、生徒と大人たちが同じ環境で過ごすことが出来ました。

初日は、講演会、分科会、夕食・交歓会が主な日程でした。講演会では、元海上保安官で南極観測隊員でもあった「西村 淳」氏が講師にお招きし、観測隊の生活をユニークにお話しいただき、映像と音楽も取り入れた希に見る感動的な講演会となりました。観測隊の極限的な生活の中での「ごはんを食べる事の大切さ」を通して、日々の便利な生活が当たり前となった時代に何が大切なのかを学ばせていただきました。

続いて分科会Ⅰでは、『魅力あるオホーツクの地域・人づくり』～自分の地域の良さや魅力、自分の地域への要望や課題、自分の将来の職業と住みたい地域(生徒)～を討議のテーマとして、三つのグループに分かれて実施しました。各グループの進行役は本校のPTA役員が務め、始めに自己紹介、そしてテーマについて考えてもらい、その上で討議を進めていく構成で行いました。各グループ活発な意見交換があり、予定時間内では収まりがつかないグループもあったようです。主な発言では「オホーツク地域は山、川、海、大地など豊かな自然に溢れ、農業、漁業など食を育む第一次産業が盛んで、生活するには大変良い環境であるなど、大きな魅力があるが、



その魅力をうまく発信できていないのではないかな。」など自然の豊かさや食の魅力についての意見や、各校から学校の特徴と各地域で抱えている悩みについての発言などもあり、高校生の「視点」から生の声を聞ける良い機会になり、参加した大人の方々も目を丸くすることがあったようです。



そして、夕食・交歓会では、野外炊飯場に場を移して、参加者の皆さんに火おこし係、配給係、片付け係など役割を分担して焼き肉を楽しみました。そこでは、本校の参加生徒が進行役となり、各校の生徒と保護者・教員のスピーチによる学校紹介や特色ある行事紹介で笑いが渦巻き、楽しい交歓会になったと思います。

二日目は、分科会Ⅱとして創作活動を行いました。内容は、常呂町で「流水焼

きつかけに、それぞれの地域社会の発展と各校生徒の皆さんの更なる成長へ繋がりますよう期待しております。

最後になりますが、全日程を通して、ご不便や行き届かないことがあったと思いますが、事故なく無事終えられましたことに感謝申し上げます。本事業の報告とさせていただきます。

平成25年度「高校生と語るつどい」

日高支部

テーマ「日高の将来像」



高P連日高支部は、8月2日(金)・3日(土)の2日間、新ひだか町静内にある「ホテルローレル」を会場に北海道高等学校PTA連合会日高支部「高校生と語るつどい」21世紀をどう生きるか」を開催いたしました。当日は日高管内の高等学校8校から生徒・保護者・教員、道高P連本部役員を含め、合計43名が参加いたしました。

当番校としては、初めて顔を合わせる生徒・保護者・教員が集合してすぐに、講演を聴き、分科会で話し合う企画では意見を出しにく

いであろうと考え、交流を深めてから意見交換をする企画としました。

【第1日目】

会場のホテルにて「開会式」を行った後に、2班に分かれてバスで移動。

〈乗馬体験〉

「にいかつぷホロシリ乗馬クラブ」で最初に馬場の中で簡単なレッスンをしてから、林の中を散策する「体験トレッキング」を40分程度の体験を行いました。どの参加者も乗馬前は少し緊張した面持ちでしたが、乗馬後は自然を満喫した表情に変わっていました。馬産地・日高といえども初めて乗馬する参加者が多く、充実した体験活動となりました。

〈施設見学〉

「新冠町レ・コード館」で施設見学を行いました。「蓄音機コンサート」や「レ・コードコンサート」を鑑賞し、そのほかレ・コード館に収蔵されているコレクションを見学しました。

日高の特色を生かしたこれらの活動を



通じて、参加者全員がこの地域についての認識を深め、日高の将来像について考える土台を作ることができました。

〈夕食〉

国道沿いにあるバーベキューハウスで、日高山脈を一望しながら、地元農家から直接仕入れた新鮮野菜や、多種類のお肉を中心に、参加者全員で炭火バーベキューを楽しみました。後半では各校の高校生、保護者、教員が自己紹介を行い、他の地域の人との交流を深めることのできた夕食となりました。

〈レクリエーション〉

日高地区で唯一施設のあたる新ひだか町の静内で、ボーリングを楽しみました。熱いゲームが繰り広げられ、成績の上位を保護者・教員が独占すると、「大

人げない。」の声に、「社会の厳しさを教えてやった。」には、笑いが起こりました。1日目の終わりに、生徒、保護者、教員同士が打ち解けることができ、次の日の研修を迎える良いきっかけになったと思います。

【第2日目】

〈講演〉

「日高の将来像」

新ひだか町総務企画部企画課長

岩 渕 博 司 様



〈分科会〉

生徒・保護者・教員が混ざった5つのグループに分かれて、講演会の話の踏まえ日高の将来を担う高校生として地域・保護者・学校に望むこと、保護者・教員から高校生に期待すること、高校生を育てる環境をどのように作っていくかな

どについて、活発な討論が行われました。



〈全体会〉

5グループの代表者が、各分科会での意見交換の内容をまとめ、報告しました。質疑応答をした後に、北海道高等学校PTA連合会副会長の村上義人様にまとめとしてご挨拶をしていただきました。

21世紀を担う高校生が、保護者・教員にサポートされながら自分の将来をどう生きるかを考える。今回の「高校生と語るつどい」は地元の高校生にとって、地域社会のことを真剣に考えるきっかけとして大変有意義な時間になったことと思っています。

ご協力いただきました管内高等学校PTAの保護者・教員の皆様に、この場をお借りしましてお礼申し上げます。

平成25年度「高校生と語るつどい」

石狩支部

テーマ「将来・夢」



9月18日(水)・19日(木)の二日間、北海道NTTセミナーセンタを会場に、「将来・夢」をメインテーマとして、北海道高等学校PTA連合会石狩支部「高校生と語るつどい」が開催されました。当日は管内の高等学校12校から、生徒・保護者・教員合わせて73名が参加しました。

初日は、開会式後に自己紹介から始まる分科会Ⅰを実施し、その後「思うは招くく夢があればなんでもできる」と題した、(株)植松電機専務取締役 植松努氏の講演を開催しました。

植松氏は1966年芦別市に生まれ、北見工業大学応用機械工学科を卒業後、菱友計算(株)航空宇宙統括部に入社し、少年の頃から夢である航空機的设计に携わる仕事に就くことができました。その業務は高性能コンピュータを用い、空気の流れを数値解析し、結果をCGで目に見えるようにすることでしたが、周囲との人間との志の違いに限界を感じ1994年に北海道に戻り、父清氏の電気機械修理の会社を、リサイクル用の特殊機器の開発等にステップアップしながら、誰もやろうとしなかった「民間人の宇宙ロケット



開発」という夢を実現させた人物です。

講演の中で植松氏は「大事なものは、感動する気持ちです。さまざまな事柄に心を震わせる感性さえあれば、夢はたくさん見つかります。そして、感動できたら、それは実現につながります。なぜなら、感動はローマ字で書くと、「CAN DO」でしょ!だから、できるんですよ。…10年後には、建設コスト1/10の建築システム、食費1/2、大学の授業料がゼロの社会を作っています。家のローンに人生を縛られず、学費にお金がかからず、食べ物に無駄にしない社会です。で

きるわけがない、と思う人がいればいるほどラッキーです。だって、僕らが現実にはいますから。そしたら僕らの一人勝ちじゃないですか。…この夢を実現するためには、自ら考えて行動する人材が不可欠です。「お金という価値だけに支配されない、人間の価値を大切に社会」そういう社会の構築が、僕が目指す10年後です。…と、「将来・夢」をテーマとした今回のつどいに集まった生徒たちはもとより、大人たちをも夢と希望の世界へ連れ去るような熱のこもった講演であり、大変素晴らしいものでありました。講演で高揚した気持ちを糧とし、盛り上がった気持ち



で分科会Ⅰの続きを実施し、夕食をはさんで夜は交歓会のミニバレー大会でも各チーム一丸となった熱い戦いが繰り広げられ、一日目が終了しました。

二日目は自由テーマのもとで分科会Ⅱを実施し、その後全体会で分科会の発表をして終了となりました。和気あいあいとした雰囲気の中で「夢」を語る生徒らの姿に、新しい北海道の創造が垣間見える、とても充実した報告でした。

参加された高校生諸君、PTAの皆様、ご協力いただいた皆様に感謝申し上げます。

臨時理事会報告

日時 平成25年11月17日

場所 ホテルライフォート札幌

出席者 役員・理事 25名

1、会長辞任とその対応

●山本富造副会長より、「10月17日付で、会長から一身上の都合による辞任願いが提出された」旨、報告され、続いて村上副会長より「次の総会までは山本筆頭副会長を会長代行とし、皆様のご協力を得て道高P連業務を遂行したい」との提案があり、承認された。

●関連し、榊原顧問より、「6月の総会まで会長不在になりますので、道高P連の活動に対し、これまで以上に皆様のご理解とご協力をお願いしたい」との発言。最後に山本富造副会長が代行挨拶を兼ね、「ご出席の理事をはじめ会員の皆様のご協力をお願いした。

2、新安全互助会（仮称）設立の提案

●提案理由説明（局長）

道高P連は昭和62年、生徒が死亡、負傷・疾病等の災害を受けた場合、「日本スポーツ振興セン

ター」の給付を補完する目的で、「北海道高等学校PTA安全互助会」を組織し、掛金に比べて高い割合の見舞金を給付するなど、全国的にも優秀な安全互助会として知られていた。ところが、ある詐欺事件がきっかけで平成18年に保険業法が改正され、PTA自らが共済事業を実施できなくなった。そこで、各学校では急遽、保険会社と契約を結ぶなどの緊急対応に迫られた。その結果、都市部の大規模校のように安全互助会に比べて「掛金値上げ」や「補償の低下」を一定の範囲に抑えられた学校もあったが、多数を占める「生徒数の少ない学校」では高い掛金等のために保険会社と契約できない事例が多く、安全互助会にかわる制度設立への要望が多数寄せられ、平成19年4月に現在の「エース損害保険」を引受保険会社とする「道高P連災害補償制度」をスタートさせた。しかし、旧安全互助会では道高P連のほぼ全加盟校が加入していたが、すでに保険会社と契約できた学校の大半が加入せず、更には、閉校や脱退する単Pが年々増え、現在、「道高P連災害補償制度」への加入単Pと人数のどちらも道高P連加盟数の46%前後でしかない。脱退の主な理由は「加入単Pの全員加入方式」にあるが、保険会社では「制度の根幹に関わるので、改めるのは難

しい」とのことだった。しかし、加入校減少に歯止めをかけなければ、消費税率倍増とも相まって、大変な事態も想定される。

そんな中、平成23年に新共済法が施行され、すべてが以前と同じとは言えないが、PTAが単独で安全互助会を組織し活動できるようになった。すでに10を超える他県は活動を始めている。生徒のために、北海道でも是非、新安全互助会を設立したい。

ただ、その実現の際、道高P連が旧安全互助会から引き継いだ資金を原資にするので、平行して、道高P連の組織、諸行事等の見直しが必要であることにも、ご理解いただきたい。

●基本姿勢と骨子

基本姿勢

「道高P連に加盟しているPTA会員の相互扶助の精神に則り、「旧安全互助会会則・給付規程等」を準用するが、新共済法で不可能な事項は、その都度検討する。

骨子

(1)道高P連加盟校が「各学校単位で加入」し、「生徒の加入は任意」とする。

(2)日本スポーツ振興センターの判断結果に基づいて見舞金を支給する。

(3)学校管理下の事故の際、生徒が死亡、負傷・疾病等の災害を

受けた時に見舞金を給付する。また、「日本スポーツ振興センター」給付対象外については、今後、検討する。

(4)加入者にとって、現行災害補償制度より掛金と見舞金のどちらか、あるいはどちらもが少しでも有利な制度としたい。

(5)新共済法では、安全互助会設立には法人化が必要であり、専門家に依頼し、法人化する。

●提案説明後、理事から質問や意見があった。

★質問・意見の一部

☆質問には村上副会長と局長が対応

★現行との比較を含め、もっと詳細な資料を提示して欲しい。

☆現在は準備段階以前の状態であり、詳細は今後、提示したい。

★加入者が多いほど加入者に有利になるのだから、道高P連加入者に強制加入をさせてはどうか。

☆全員加入方式は現制度ではデメリットとなっているため、難しい。

★子どもたちのためを考えた提案だと思う。前向きに検討したい。

★掛金が少なく、補償が増える方向だと思う。生徒のためになるので賛成。

★全員加入が改められるのは有り難い。

★基本的な方向性は了解できるが、旧安全互助会とは時代背景

が違う。加入者が多くなるよう鋭意努力する必要がある。

★保険会社が関わらない、掛金・補償の面で有利、全員加入方式ではないなど利点が多く、設立に賛成。今後は広報が重要。

★諸行事で支部の負担が大きすぎる。道高P連事業の見直しが必ずやだ。

★振興センターと基準が同じなど利点が多い。

★賛成。加入者を増やすためには学校単位で保険会社と契約している学校への働きかけが大切。

●今後のスケジュールについての説明。（局長）

新安全互助会業務を平成27年4月から開始するためには、まず、平成26年5月の理事会で、「6月の道高P連総会に提案する新安全互助会設立案」を決め、続いて、6月の道高P連総会で「新安全互助会設立を決議」し、同日、「新安全互助会設立総会を開催」しなければならぬ。

本日は提案理由とその経緯を説明し、ご意見を伺ったが、2月開催の次回理事会では、5月の理事会に向けて、設立の賛否について議論することになる。

※報告事項等については省略

支部だより

釧路支部

感謝と初心を忘るべからず

釧路支部長 鈴木敏夫
(北海道釧路商業高等学校PTA会長)

釧路支部は、現在十四校、十六単Pの加盟する阿寒・釧路湿原の広大な自然と海に囲まれた支部です。

私たちPTAは「子どもたちの応援団、主役は子どもたち」を合い言葉に地域の特性を生かしながら、各単P毎に、多くの事業に取り組んでいます。

五月七日に道高P連宮川恒美事務局長をお迎えして、釧路プリンスホテルに於いて支部総会を開催し、二十四年度決算、二十五年度の事業計画、会計予算、役員改選などの承認をいただきました。

今年度は、第六十三回北海道高等学校PTA連合大会(釧路・根室大会)が、釧路・根室支部が主管となり、六月十四・十五日の二日間に行われ、釧路観光国際交流センターを主会場に、釧路湖陵高校・釧路工業高校を分科会会場にして開催されました。

大会には、全道二百三十校余りの高校から、千名を超えるPTAの方々が集いました。PTAの活動に対して、精励されている姿勢がうかがわれ、お一人お一人の想いが相通じた大会であつたと思われまふ。



この大会を準備していただいたPTAの方々のご協力やご支援のお陰と衷心より感謝申し上げます。

開会式で、中島圭会長は、「いじめや暴力に対しては、PTAが全力で子どもの命を守っていくこと」「各支部や各学校単位でのPTA活動がこれまで以上に活発化し柔軟な対応ができる組織を目指すこと」の二点について述べ、PTA活動の重要性を強調しました。

私たちPTAは、子どもたちが、日々学び活動するステージを見つめ、励まし、援助しながら、自己表現を図るプロセスを温かく支える応援団でなくてはいいけないと思います。

子どもたちの主体性を育む、意欲的なPTA活動を実践してまいります。

子どもが赤ちゃんの時に、初めて歩いた一歩、一歩を思い出して下さい。赤ちゃんが一人立ちして、ふらふら、よちよちしながら、初めて一歩、二歩、三歩と歩いた時のことを、親として、手を打って応援してあげました。危ない時は、後ろから手で支えてあげました。

PTA活動は、学校・家庭・地域が三位一体となって、子どもたちに手をさしのべる運動、活動の展開であると思います。難しいことではありません。さあ、今から実践して下さい。「今日も元気でいってらっしゃい」と、学校に送り出して下さい。毎日の積み重ねが、PTA活動の礎になると考えます。

当支部では、十二月に生徒会交流事業(第二十回生徒会サミット)が行われ、各学校の生徒会交流が行われることになっています。各単Pが協力し、子どもたちをPTA・地域で育てる活動をより一層活発化していきたいと思っています。

空知支部

空知支部より

空知支部長 橋浦正広
(北海道芦別高等学校PTA会長)

空知支部は私学を含めて二十三校二十四単P(生徒数約七八〇〇名)で構成されています。支部事務局は平成二十四・二十五年度の二年間を芦別高等学校が担当しております。

平成二十五年度は、支部総会を六月一日(土)に芦別温泉スターライトホテルで開催いたしました。一〇〇名弱の参加をいただき、予定されていた議事もスムーズに進めることができました。総会終了後の懇親会では、各校の紹介や地域のPR等の話があり、大変和やかに有意義な時間を過ごしていただいたと思っております。

さて、空知支部秋季研修会は、十一月六日(水)芦別温泉スターライトホテルにおいて、参加者九十名で開催いたしました。

開会に先立ち空知教育局による「空知管内親学講座」を実施し、「進路に関する保護者の意識と子どもの意識」と題して進路選択における子どもへのアドバイスについてお話しいただきました。

今回は、木村 まさ子氏

を講師にお招きし、「育みはぐくまれ」と題して講演をしていただきました。「いただきます」「お返し」「ごちそうさまでした」などのことばの力、食べ物に関わる人の思いと生み出してくれた自然の力を想像する力の大切さについて触れ、様々な心に届く言葉(ことば)の大切さについて話されました。

また、自らの体験から褒める言葉の力について(褒める↓自分を認める↓自信がつく↓挑戦する力・決断力)紹介され、自分を褒める言葉が増えると他人も自然と褒められるようになるという効果について語られ、自分を褒めることの実践を勧められました。

最後に「あなたがいたから」という言葉を紹介され、参加者一人一人が「あなたであり、高校生のお子さ



んにとつての希望であるので健やかに自分らしく命の時間を大切に使うして下さいと講演を結びました。

本年度をもちまして、空知支部事務局としての二年間が終了いたします。来年度からは栗山高高等学校に事務局が移ります。支部の事業を運営するにあたり、管内の各単Pの皆様のご協力と道高P連のご支援により、無事終了することができましたことを心よりお礼申し上げます。空知支部からの報告といたします。